

義太夫雜誌

太 棹

第七拾壹號

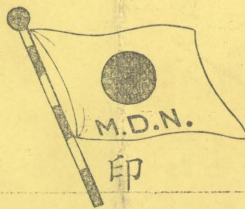


傳思坊

東京太棹社發兌

醫療用治療界の寵兒!!

於各大博覽會
優獎良國產金盃賞牌多



製成藥器

本木注射針

排號本木大熊

於東洋に於ける
斯界のパイロット!!

製成品種目

齒療用	醫療用	超不酸化鋼製	不酸化鋼製	引拔鋼製	英國最優鋼製	白八金製	十ツケル製
-----	-----	--------	-------	------	--------	------	-------

東京市瀧野川區中里四四七

本木注射針製作所

所主 本木梅治郎

電話水石川(85)二四三七番

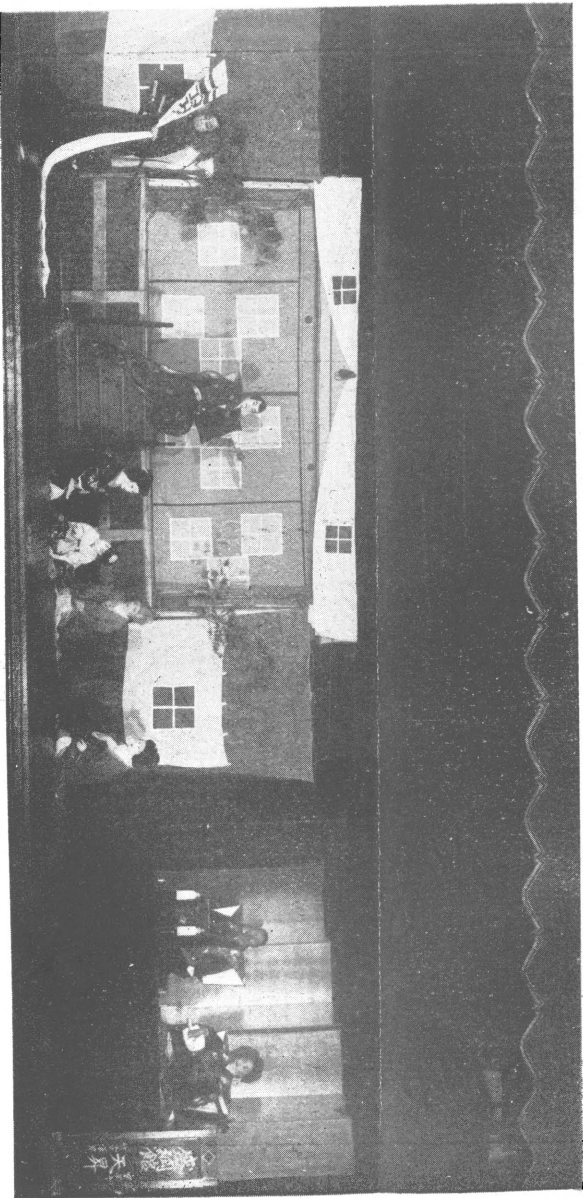
出張所 東京市本郷春木町二ノ五

電話水石川(85)三二一〇番

研究所 千葉縣君津郡富岡村田川

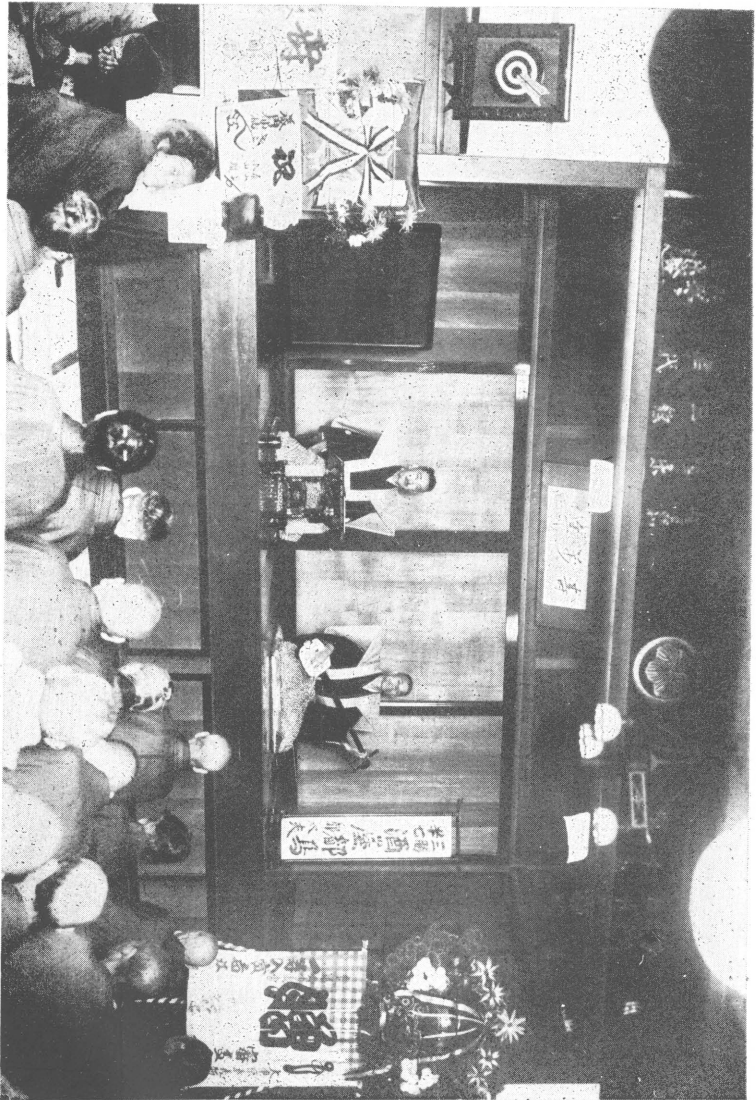
り 振 座 高 の 氏 昇 天 寺 藏 寶

『屋陣綱盛』の會夫太義都東催主社本るけ於にルーホ屋松草淺

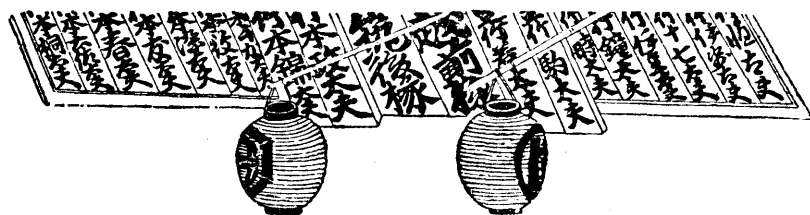


(治榮)妙微(菊扇)政時(次津三)簡兵田和(治勝)綱盛……劇役優俳座一治勝東坂
(鶴小)郎三小(觸目茶)郎四小(子秀)進注(治定)八孫(歌秀)水箴(治代千)瀬早

念記賞入氏鳥都田藤



師夫太都本竹線味三と氏鳥都田藏は眞寫



(行發回一月毎) **棹 太** (日五廿月二十年十和昭)

◆◆◆ 號壹拾七第 ◆◆◆

◇寫 眞 寶藏寺天昇氏の高座振り・藏出都鳥氏入賞記念

◇霜 夜 雜 感……………小泉 蛙 鳴……………(二)

◇文 樂 樂 屋 圖 繪……………宮尾しげを……………(四)

◇ラヂオ淨曲漫評……………金 王 丸……………(六)

◇素 義 風 流 線……………芳 河 士……………(九)

◇東 都 義 太 夫 會 (六十五回)……………(一〇)

◇松本翠影氏出版記念會……………(一一)

◇稽 古 見 臺……………芳 河 士……………(一三)

◇犬猫供養塔の竣工……………(一六)

◇全 國 素 義 略 傳……………(一七)

◇商 賣 繁 昌 記……………(一九)

◇太 棹 社 彙 報……………(二〇)

◇各 地 通 信……………栗田 金昇・魁家 廣丸
藤井 天海・鈴木 錦祥……………(二六)

◇編 輯 後 記……………芳 河 士 記……………(二七)

◇神聖義太夫道より不徳漢を葬れ……………(二四)

——再び聴衆の改革を叫ぶ——

霜

夜

雜

感

小 泉 蛙 鳴

一、秋の豊澤會

豊澤會の春秋二季の大會も淨曲愛好者から鶴首待望される程、確固たる地位を東都淨曲界に獲得するに到つた。

十月卅日の第廿六回大會も超満員の盛況で、而も聴衆が眞面目な態度で當夜の語り物に接してゐる點、私は豊澤會の爲めに衷心から祝辭を呈する。

豊澤會の人氣は何に起因するか？

第一に會員一同の眞剣な努力である。私は一度猿之助氏宅の稽古を拜見した事があるが、その烈しさに對して私は自ら頭を下げ、眼頭を熱くした事實を永久に忘れないであらう。

第二に珍らしい古曲——特に景事、道行物——の再演の魅力の威大さにある。これは私の屢々力説する點であるが短時間で三味線の活躍する淨曲こそ現代人と淨曲を結合する最も有効な鍵である。

今度も景事「日光山」が人氣の中心になつてゐた。

私は「日光山」を心底から愉しく聽いた。そして失禮乍ら、現在語つてゐる人々にこの英語の意味及び作者の意圖するシヤレが奈邊迄理解されるかを考へ、それと同時に明治二十四年四月十五日の公演に際して語る人、聽く人がどんなに驚いた事だらうと想像し、その當時の、狀況を松太郎師匠から話して頂けたら、どんなに面白いだらうと頭の中はそれに關する想像で充され、こみ上げて來る微笑を禁じ得なかつた。

豊澤會よ頑張れ。そして三味線弾きの餘技といふハンデイキヤツプを取除いた王座を獲得する日の一日も近からん事を祈る。

二、歌舞伎座の素女會

竹本素女が杉山其日庵先生を偲ぶ淨曲會を歌舞伎座に開催して、満員賣切れのレコードを作つたのは近來の快事である。平素餘り女義を好まない私も當夜の顔揃ひと語り物が珍らしいので同好の友人に聽かせたく二十八日の朝、歌

舞伎座に行き入場券を求めると、同座では入場券は一枚も賣らない事、尙、私の持つてゐる入場券を引替へんとするや場席は、三階の菊席（昔の五等席）しか残つて居ないと説明されて暫し呆然たる態であつたが、無いとなれば一層欲しくなるのが人情の常で、素女會の事務所へ電話して辛うじて二枚の切符を賣つて貰つた。

東劇や明治座で浪花節の名人大會を開催すると三圓の場代で補助椅子が並べ切れない事實は屢々知つてゐたが、東京在住の義太夫の師匠連が歌舞伎座で公演するなんて夢にも考へなかつた事實を女義が實行して大成功を示したのだから驚かざるを得ない。

勿論、『死せる其日庵歌舞伎座を満員にさす』といふ條件も考へねばならぬが、この冒険を敢行した素女や松竹の主腦部の度胸に敬意を表する。

興行をやつて満員を獲得するといふ事は興行主の悦びは勿論、観容の方でも悪い氣持がしないものである。この盛況に氣を良くして東京因會の大會を歌舞伎座で開催する位の意氣込みを東都義太夫師匠連が示されたら幸甚である。

三、犬猫供養塔建設

最近、豊澤猿藏氏から、犬猫供養塔が竣工して、十二月十四日に回向院で入佛式を舉行するから参列して呉れとい

ふ葉書を貰つた。

どんな動機で、どんな物が作られ、どんな形式の入佛式が營まれるのかそれに就いては全然未知で總べてを當日の楽しみにしてゐるが、三味線を生活の材料にしてゐる人達が犬猫の供養をしてやるといふ事は大變良い事と思ふ。

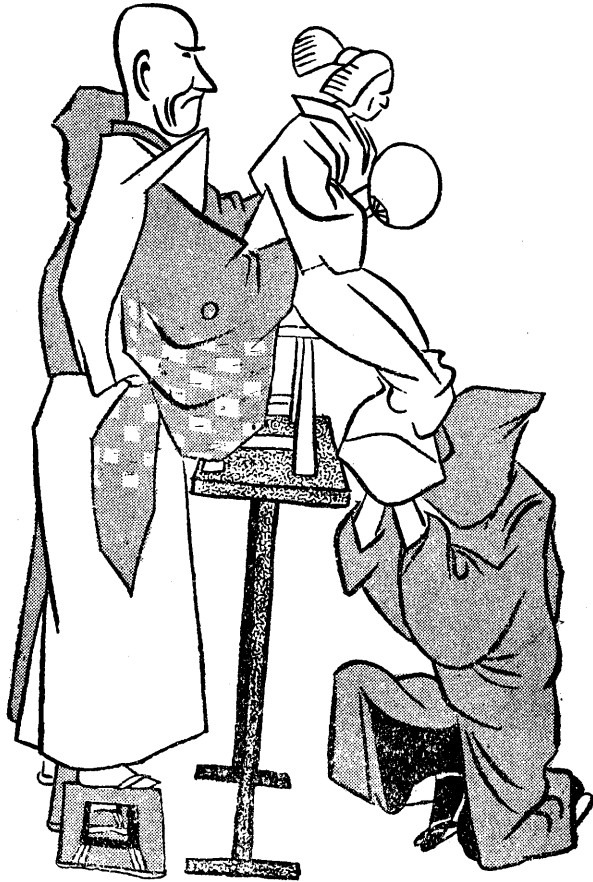
私達醫學に關係するものには解剖祭と云つて醫學研究の材料として死體解剖に附せられた人々の爲めに一年一度解剖祭が舉行される。

學生時代には十月廿八日に芝の増上寺で解剖祭が舉行される度に學校、病院關係者の殆んど全部が参列して讀經に和し、焼香したが、その度に何かしら自分の職業に對する反省を要求されるようで意義のある催しと思つた。

尤も解剖祭の参列者に呉れる菓子包を二つも三つも貰つて得意になつてゐる不心得者も居たが、其日丈けは不思議に不親切な事務員、生意氣な看護婦、採點の辛過る教授等に關する不平を忘れて同業に關與する者の集ひとして、非常に和氣に充ち満ちた愉快な想ひ出を遺してゐる。

この意味に於て、十四日の供養式には淨曲を生活の手段とされる人々が一人でも多く参列される事を欲し、更に東都淨曲界に於ける快き年中行事の一つに數へられる事を希望してこの雜文を終る事にする。

樂 樂 文
尾 宮



人形が腰掛けた時

足遣ひの樂でないことは、かつて三人遣ひの時申し上げました。圖は太十で母親が朝顔等に水をやつて一休みしてる時です。人形が腰をかけた形は横から見ると、こういうことになります、足遣ひは片膝ついて、暫くこの形を續けます、立つてゐる時より苦しいそうです、上下きた人形遣の後、に居る黒衣は左遣ひです。

(十) 繪 圖 屋

を げ し



人形が煙草を喫ふ時

肉弾三勇士の操をこらんなにつて、三勇士が煙草をまわりもちで喫ふのをこらんになつて、プアーと煙をはくのでびつくりされた方が澤山ありました。種をあかすと、人形の頭の後から口へ頭の中を竹の管をはめこんでおき頭の後へその竹管の先を出しておき、喫ふ時は、人形遣ひの後で後見が本當の煙草を喫つて煙をそれへ吹きこみます。すると如何にも喫つた様に見えます。

ラオオ 浄曲漫評

文樂若手 (十月卅一日)

一谷嫩軍記 組討之段

豊竹呂太夫

絃 鶴 澤 叶

『青年和樂の夕』といふ放送趣向、謡曲、常盤津、長唄、と何れも名流家元の御曹司連の實は甚だ失禮な言ひ分ながら、あんまり感服も出来ぬ、怪しげな音曲の、ドツサリを承はつたのが、我が呂太夫と叶さんであつた。其日庵主杉山大人が、急死の前、呂太夫君の『長局』の口を聴いて、大に見込ありとなし、爾來に最負にするとあつて、叶さんと二人で庵主を訪れ、種々雑談を聴いたのが、最後であつたといふ事を傳へ聞いてゐる。この呂太夫君、十一月の文樂顔見世興行には大序の師直と、五段目二ツ玉、七段目の伴内など

の役もついて活躍しやうといふ、その呂太夫君！さてその一谷組討『去るほどに御船を始めて……』の謡ひがムリもドツシリと、オ、イ〜の熊谷の呼びも先づ〜といふ所『朝日に輝く劍の稻妻、かけよせ〜てふ〜……』のくだり、叶さんの絃もよければ結構な出来と聴く。

時間の都合、玉織姫のくだりを全部抜いて直ちに檀特山になつたのだが、この段切りは今一イキ熊谷の悲痛の場面が現はれて來なれば、此の一段の畫龍点睛にならない、惜しい事であつたと申さう。

文樂中繼 (十一月九日)

假名手本忠臣藏 勘平住家の段

豊竹古靱太夫

絃 豊澤猿糸

十一月の大坂四ツ橋文樂座は、顔見世とあつて、忠臣藏の通しを出してゐた。その六段目、勘平切腹を、古靱さんが語つてゐる。

絃は、合三味線の清六氏病氣の爲め、拔擢された若手の猿樂君が、懸命の努力である『身賣』が濟んで、床がぐるりと廻つたのであらう、萬雷の拍子が聴こえる。やがて、文樂特有の口上觸れがある。オクリが彈出された。さて、一句一節聴き漏らさじと、殆んど息をつめる我等。好きな古靱、最負の古靱、もうとかくの評言を加ふる餘地もない、嬉しい出来榮えてはある、といふべき筈ではあるが、ちよつと困つた事に當夜はさうは行かなかつたやうな氣がしたのである。第一は、此の一段中最も大切な老婆おかや？が、恐ろしく時代になり過ぎはしなかつたか、腹を切つた勘平が、最後まで、甚だしつかりとした調子が變らなかつたのではあるまいか。郷右衛門やエ崎は無事であつたが……。仁にはまつた演し物でありさうに見えて、實は古靱さんのものでないのではあるまいかとさへ、遂に思つたのであつた。程經て此の稿にペンを執つたので、他の細かい處は忘れてしまつて、ひどく

要領を得ない譯になつてしまつた。

大阪女義

〔十一月十七日〕

明烏六花曙

吉原揚屋の段

竹本清糸

絃豊澤仙平

金丸初見夢の方である。仙平さんは毎度の腕達者先以て絃は結構に伺ひました。新聞の紹介によると、清糸さんは故人豊竹時太夫の門で、最初時太郎といひ、後、先代清六師に就て研さん、清糸と改め、清六師以後今は友次郎師の領かり弟子といふ事であれば、女義としては實に、大層に經歷？肩書付きの方なのである。所が程經て此の稿にかゝつた拙者甚だ以て申譯ない次第ではあるが、とんと一切の印象を薄くして困つてゐる。唯だ前半の變結のお辰が思つたよりでかされず、浦里とのやりとりも間延びになつた嫌ひがある。後半雪責めは結構で、いたいけな禿にもほろりとさせられた。彦六の件りが時間の都合、省かれたのは残念である。

新人三氏

〔十一月二十三日〕

一、一谷嫩軍記

熊谷陣屋の段

柴野筑波

絃豊澤團八

本名半次郎さんとおつしやる、初めてではない新人、『陣屋』とは大きな演し物である。出の間稽や勝手の違つたといふ感じだつたが大體に於て壯重さも相當であつて、ホツと安心する『不屑至極の女め』の『め』に難があり、藤の方の『サ、相模、助太刀して夫を討たしや』が、車輪に過ぎた爲めか男になつた。次の相模の『あいと返事も胸にせまりながら……』などは結構に出来たと思ふ。物語の中に、『一きは、すぐれし緋緘……』など、充分に届いたのは豪い。熊谷のイバリ詞が、やゝこなれ切らぬ憾みがあつた。兩馬の、てチヨン、間時十八分。

二、玉藻前職袂

道春館の段

和田春和

絃野澤道之助

春和さんの『玉三』は、例の報知新聞の東

西競演をはじめ、五十義會からその後各所の催ほして數回拜聴した香伯翁仕込の十八番物である。先づ喜ぶべきは、聲帯の調子が非常に多かつた事である。報知の時はノドをやつてゐて、爲めに、何點かを減じたかとおもふ程であつたのだ。堂々として鷲塚金藤次は出て來たが『かくと知らせに館の後室』以下數行、即ち御臺の出を食つて、直ぐに金藤次の『上意の次第餘の儀にあらず』(飛んだのは困る。時間節約といふ心持は判つてゐるが、僅々二分か二分半か、恐らく三分とはかゝらぬのである。續いて『はれ間はさらに見えざりき』から又た大飛びに飛んで『母の嘆きにかきくもる』のさはりである。かつら姫は、今少し可愛らしくゆかぬものかとおもつたが、總て、樂々と、充分に情を語らうとする努力であつた。段切りの『三つ瀬川』が少々怪しかつたのは、絃の方かな。

三、奥州安達原

袖袂祭文の段

高野喜代

絃竹本三福

高野さんは金丸初めてのお耳である。先

づノツケから、おや／＼美音の持主であつて大層玄ッぽい、と好感を持つて拜聴する『身にこたゆるは血筋の縁……』女義恰好の演し物である。祭文も至極なだらかに『あと歌ひさし』で切られてしまつたには、全く惜しい、とおもつた、鎌杖も一通り、演夕の詞がちよつと藤間房子に似て、それも先づ／＼である。それよりは、總て充分に口を開けて語られるのは嬉しかつた。これは何でも無い事ながら素人の方には中々難かしい、殊に女義の方には珍らしいとおもつた。感服。

文樂若手

〔十一月廿五日〕

本朝廿四孝 十種香の段

八重垣姫 竹本小春太夫
武田勝頼 竹本相生太夫
濡衣 豊竹つばめ太夫
長尼謙信 豊竹和泉太夫
原小文治 竹本さの太夫
白須賀六郎 竹本津の子太夫

絃 鶴澤友次郎

文樂の若手、所謂中堅の人氣揃ひで、十種

香のカケ合ひだ。絃は絃下の友次郎師、東京で夜長のお伽には勿體ない次第、文明の利器ラヂオに感謝すべきでせう。と嬉しがるのは、まあ僕等淨曲淫亂黨だけかも分らぬ。

『行水の一流れと……』のまぐら、それ既に、四段目の金襖物の感じが現はれたかどうかは判らない。勝頼を承はつてゐる相生太夫である。直ぐに八重垣姫の後ろ姿が上手の間どころに現はれる。それは新進美聲の小春太夫である。續いてコチのつばめ太夫の濡衣である。先づは三人競演といふ譯である。

美聲は即ち類ひ稀れなる美聲の持主ではあるが、小春太夫といふ人の八重垣姫は、アノ詞の間の品位を缺く聲柄が僕は氣に入らないで困る。誰れかラヂオで聴いてゐて、あのお姫様に惚れ／＼した人があつたら、手を舉げて呉れ、と言ひたい位、嬉しくなかつたのである。嘗て萩の政岡の時も莊重を缺いた事は僕は感じた事であつたが。……だが地合は救はれる『可愛ゆがつて……』や『うそいつは』に言はれうか』など結構であつた。後の『勝頼様でも無い人に、たはむれ事……』などは

ア、拙い、とおもつた。それから『如何にお顔が似ればとや』は『似ればとて』と言つてゐた。

勝頼と濡衣は、無難と片付ければ片付けられる處だが、二人とも年輩が老けて聴えた。殊に、あの赤い前髪仕立の勝頼は、何故、今一ト調子上げて言へないかと、これは嚴に相生太夫に言はうとおもふ。お附合の出演だが、和泉太夫の謙信は、大體しつかりはしてゐたが投げたのか遠慮になつたか、詞尻りに力が足らぬ、あの荒氣の大將といふ本文に叶はぬ、とおもふ節も氣になつた。さの、津の子、御兩人の原、白須賀は御苦勞といふの外はない。

友次郎師の絃は、狐火の狂ひを聴きたかつたが、それでは、あまり小春太夫の役が好くなり過ぎる。テストや何か、嘸ぞお骨折の事であつたらうとおもふ。

金王丸氏の『ラヂオ淨曲漫評』は益々好評『遠慮をせずに嚴評を乞ふ』と投書もありました。

素義風流線



瀧野川の大御所

山田 壽瓢氏

◆：瀧野川大原に樺や榎の大樹の茂みの中に、吉めかしい門構え、稍斜めに庭を傳ふて玄關がある。

◆：見るからにその昔、玄齋などといふ醫者様又は儒者の住居のやうな構えで、こゝに、東都素義界にその人有りと知られた山田壽瓢氏が靜かに住まはれてゐる。

◆：氏は新興の地大塚終點に山田洋品店を經營する他、思ひも掛けず千葉に養魚場をも經營してをられるが、此の養魚池は千坪程のものが三ヶ所で、今の處鰻が千五百貫、鯉が七八百貫の賣上げではあるが、大量に生産する事も遠からざるであらうとのこと。

◆：岸からこれ等の餌として鰯をどんどん運ぶのださうだが、費用は人足と餌だけの事で、とも角も至難なのは水の調節ださうである。

◆：かうした二方面に奮闘してをられる忙しい中に、義太夫は竹本綾秀師に稽古をして貰つてゐる。なんせ綾秀會の重鎮でありその組織的な、そして紳士的な點は大いに綾秀會の誇りとする所であらう。

◆：氏は初め亡き君太夫師に師事して、なにしろ義太夫道に入つて以來、既に五十年の歴史を持たれてゐるのだから、その造詣蘊蓄は恐ろしい程である。

◆：語物も數々あれど「本下」の如きは

彌太夫うつしの素晴しいもので、血判の件などは彌太夫をつくりといふ定評がある。

◆：それはともあれ、氏の温篤なる人格は、東都素義界でも有名なもので、本社主催東都名流大會第一回には、呂壽、壽豊の兩氏を勧誘されて出陣、第二回にも呂壽氏と共に、堂々と綾秀軍の爲に氣を吐かれた。

◆：そして氏の日本趣味の一面には、又漢詩もよくされるので、これとても親代々の洗練されたるよき趣味として我々のまた敬慕する所以である。(考生)

民 事	刑 事	商 事	特許 事件	迅速 懇切 に取扱ふ
扶桑教權大政正 前判事				
辯護士 法學士				
飛石久太郎				
併號 かなめ				
東京市牛込區東五軒町五四 市電東五軒町停留場際 電話牛込四七四七番				

主	本
催	社

第六拾五回 東都義太夫會

◇：昭和十年度最後の身振劇入り東都義太夫會は、十一月廿五、六の兩日、例によつて檜舞臺淺草松屋ホールに於て開催された。

◇：本年の納め、當分のお別れといふに加へて出演者は相變らず東都素義名流の方々とて聽衆は開場早くも満員、場席の取り合ひに大騒ぎを演じる程の盛況であつたが、開幕と同時に忽ち場内は寂として、時々起る拍手の音は、廣い會場内に快い感激の渦を巻き起す。東都義太夫會ならでは、みられぬ嬉しい演奏氣分である。

◇：扱て、例に依つて兩日の評判記に移るが紙上を以て茲に厚く御禮申上げたいのは、永い年月の間、回を重ねる事、實に六十五回、及月々の公演毎に御後援御出演下さる方々、及び聽衆の皆様で、本年度最後の公演も遂に終りを告げ、来る昭和十一年度は、春陽一月を以て捲土重來益々名實共に堂々たる東都義太夫會たらしめたく、茲に厚く感謝の意を表する

と共に、改めて倍舊の御後援をお願ひ申上げる次第であります。

【初日】

合 邦 高 瀬 操 氏

絃 野澤道之助

例の語り巧者、青砥左衛門の件も入れ、一字一句も抜かぬ力演は嬉しいもの。

太 十 平 井 壽 樂 氏

絃 竹本朝見太夫

堂々たる音聲に、語物もうつてつけ、舞臺と相俟つて、手に汗を握らせた一幕。

寺 子 屋 廣 瀬 いろは 氏

絃 豊澤團市

高座へは三度目だといふ出來立てのほや／＼とは思へぬ代物は流石といふ他は

宮戸座の素劇

平井榮氏を始め

音女會連の奮闘

毎年忘年会の意味で開演し、嘗ては寶藏寺天昇氏や野澤道之助師なども出演した事のある淺草素劇團は、今回は十一幕からの狂言を並べて、十二月十八日より三日間毎日午前十一時から夜の十一二時迄打つ通して大熱演を振ふといふので前人氣は非常なものであるが、平井榮氏は鮎屋の権太、太十の光秀、車引の時平公山崎力氏は、太十の久吉、鮎屋の梶原、井上喜鶴氏は鮎屋の彌左工門を、又音女會の昇之助は操、油家の後家、宮榮、春は宮里、志磨吉は陳屋の模相といふ役割にて、鈴木一花月君は鬼一、さつき、彌太六、番頭與太郎を勤め、出語りとしては揚屋（かきつ、志磨吉）太十（春、志磨吉）野崎（富之助、志磨吉）鮎屋（富之助、富千代）で出演諸氏は毎日の猛稽古にすつかり年忘れの氣分が溢れてゐる。

ない。

辨 上

大用大嘉津氏

絃 豊澤 猿藏

懐しや大嘉津氏の出演、全くの久振り

に、聴衆はたゞもう大喜びの呈はさこそ

く。

廿四孝

近江清華氏

絃 鶴澤寛三郎

ツレ 智恵子

琴 鶴澤紋三郎

華かな引抜の肩衣、朗々たる美聲、時

間を考慮されてふかされたのは思ひやり

【二日目】

新口村

安藤都昇氏

絃 竹本都太夫

多忙の中を切り抜けての出演、孫右

衛門の情合ひもすつかり手に入つて上

宿屋

田口司重氏

絃 豊澤 團吉

身振り劇初出演とは思へぬ堂々たる所
演、艶もあり愁ひもよく應へた。

野崎村

細川清氏

絃 野澤道之助

ツレ 野澤 越道

十八番物として悪からう筈もなく、久
作などまた一段と冴えて、聴衆喜ぶ事限
りなし。

忠 六

湯原清司氏

絃 豊澤 猿藏

何しろ腹も強く、めりはりの上手な方

とて、役者とも意気が合ひ、充分堪能し
た出来榮え。

忠 九

寶藏寺天昇氏

絃 竹本巴津昇

これはもうすつかり手馴れてしまつて
ゆつたりとした風格も生じ、情合など至
り盡くせりの大出来であつた。

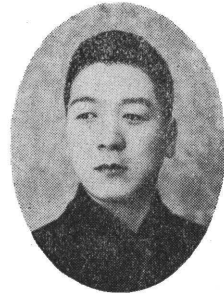
神田・日本キネマの實演

小黑玉明氏大車輪

日本キネマ(神田、五軒町)は改築御
禮記念として十一月十四日より一週間竹
澤龍造一座を聘して中幕に『先代萩』御
殿より床下忍場まで三場上演。館主小黑
玉明氏は仁木彈正に紛し、凄味も相當利
いて覇氣もあり、堂々たる押出しに立廻
りなどは存分あはれて玄人も跳といふ巧
妙さを發揮して大喝采を博した。一座の
支配入高見澤龜次郎君は男之助と伊達安
藝の二役で、下手な横好きと思ひきや、
これはどうして中々黒ッぽい處を見せ
(蚊のやうな細い脚は少々惜しい)竹澤
佳照の八汐、竹澤龍富美の政岡も不相變
達者なもの、説明の庄司、林、外竹澤長
壽君等の捕手も車輪に勤めてゐた。
小黑玉明氏は嘗て飛行館に於ける津登
比座の公演にも、だんまりの袈裟太郎、
鮎屋の梶原をつき合つた程、素劇には頗
る大の趣味の持主、來春は好者と語らつ
て丸橋の「忠彌」か何かで一つ充分あは
れて見たいと言つてゐる。

稽古見臺

芳河士



若き生辭引

鶴澤絃平師

◇：六疊二間続きの、陽當りのよい二階、柱は淺草廣小路を向ふにした静かな一角。若き三絃界の生辭引鶴澤絃平師のお宅である。

◇：例によつて何氣なしに床の間を拜見すると、あるある。谷文晁の大作、青綠山水が一幅、これは文晁としては稀有の密畫で、素晴らしい逸品。

◇：和舟氏が、お宅に置いておいては樂しむ折がないといふので、師匠の床へ掛けて、お稽古乍ら嘆賞しようといふ趣向。

◇：稽古場の次の部屋の書架は、平凡社版百科事典がづらりと並び、その他日本文學大辭典、國語大辭典、淨瑠璃傑作集、西鶴名作集は勿論、俳諧名作集迄づらりと用意されてある

この若くして野心滿々たる生辭引の師匠の精進が、さこそとうなづかれる次第である。

◇：その傍に御連中の連名札が並べられあゝる。いろは順で曰く、六花、和舟、可笑、巽絃、彌美登利、ひばりの諸氏。多士濟々たるものである。

◇：絃平師に文晁の年代を訊かれて、「さア」と頷をかしげると、早速傍の百科事典が師の手許に寄せられる。九十何年だといふ事が忽ち判明、こゝいらが研究心の強い所で、暫く當時の畫家の話が交されて、吃の又平に迄及ぶ。

◇：次いで眞凝の話が出る。それには「この間菱田春草の枯竹小禽の圖を、僕に鑑定して

くれと友人が持つて來たんだが、僕は餘り感心せんといふたら、その後、木村武山も矢張りよくないといつた相で、ある畫家は、しかも大家だが、金さへ包めば何んでも極め書きの箱書をするといふから、どうも當てにならない話さといふ。そこで、藝界も亦同様なみによつてどんないゝ名でも襲ふ事が出来るのは當然だと大笑ひする。

◇：午前は自宅で稽古、午後は淺草の平井榮氏、大森の東光氏等の處へ出稽古だといふ。なにしろ多忙な師匠である。

◇：文學座の叛逆者、或る一部には兎角の評もあるやうだが、なんといつても指折りの研究家で、どうしても藝人といふよりは、學生氣質のところがあり、二三年前以前安藤都昇氏團市、道之助、新造の諸師が一週一晩づゝこの部屋に集つて義太夫節の研究會を開き、夜の更けるのも知らずに研究したといふ話も、さこそと思はれる。

◇：辭して、駿河屋旅館の角迄來ると、これからお稽古に行かれる和舟氏にお逢ひする。

「おやこれからお稽古へ」
「なんしろどうも忙しんでね」
からした對話も、如何にも淺草の初冬、正午ごろの樂しい挨拶であつた。

神聖義太夫道より

不徳漢を葬れ

—再び聴衆の改革を叫ぶ—

○：本年夏頃神聖なる義太夫界より、素義専門のタカリ不徳漢を葬れといふ一文を掲げて、斯界の輿論を喚起したが、この程、又々不徳漢の跳梁する所となり、茲に再び太棹社時評として、取り上げる所となつた。

○：一例、宮松亭で豊澤猿藏師の納會のあつた時の事である。階段下で、東都五十義會の重要な某氏が、首に白い布を巻いた丈のヒヨロリとした男に摑つて、素女會の歌舞伎座公演の入場券を強請されてゐた。

○：某氏は非常に弱つたらしく「ほんとに無いんだよ、あればやるよ」
「あなたは佳照さんから行つてる筈ですよ、一枚だけでいゝんだから下さいよ」
「佳照の處へは暫く行かないから、切符なんか来ないよ」

この男たうとう終ひに
「それでは佳照さんの處へ行つて、且那がさういつたといつて貰つてきますが、いゝてせうな」
「行つてもう無いだらう」

○：なんといふ執拗さであらうか。この男外套も着た儘、帽子も冠つた儘といふ無禮な態度である。入場券を持つてゐたら最後、この五月蠅さには閉口して、恐らく與へられる事であらう。こゝにこれら義太夫界に巢喰ふ不徳漢を跳梁させる根元がある。

○：何故この場合斷乎として、金錢の強要など、その他のタカリに應ずるのであらうか。平常俱樂部で語る場合「やれ素義界の重鎮」「何處そこの親玉」「大棟梁」などといはれて「フン、来てをつたな」と高座で嬉しがつて

杉山其日庵翁を偲ぶ『竹本素女會』が十一月廿八日午後四時より歌舞伎座に於て開演されたが、満員、満員、文字通り立錐の餘地もなき未曾有の盛會を極めた。當日切符を引替えた人は、一階も二階も賣切れて、殆ど三階に追ひ上げられてしまつた。

歌舞伎座に於ける

素女會の盛況

三階席の異觀

三階も普通五等位のテツペンから、平山蘆江氏が「満員の豫感はあるが、こゝまでとは思はなかつた、こんな處は初めてだがいゝ經驗になつた、驚いたネ」と下界の高座を見下ろしてゐる。

何しろ、平常芝居見物の客種とはこゝろりと變つた紳士淑女を以て、此の三階の梅席菊席を埋めて異彩奇觀を呈してゐた。

後で掛聲賃をやる人もあるが、かうした掛聲賃を出す人のあるうちは、断じて、斯界よりかゝる不徳漢のタカリ連を一掃する事は覺束ない。

○：歌舞伎座の素女會で、いやしい掛聲をする手が二三入り込んでゐた。

安藤どる氏が、「何處からこんな連中が入り込んで来たのでせう」と不思議がつてをられたが、全くの不祥事件といふの他はない。

○：歌舞伎座の廊下で、かうした手合に「旦那いらつしやいまし」

「やあこれは」

などと、御叮嚀に、かうした義太夫ルンペンタカリ屋に辭儀をしてゐる素義の紳士を見たが、記者は心から情けなくなつた。

○：「どうも今日の出来ときは大したもので、か、眞正面からおだてるのがゐるかと思ふと、又、やり方を變へて、「けどあそこの件は一寸研究が足りないやうですな」

等と、一ツばしの批評家面をして、お爲ごかしをやるといふ戦法もある。

○：かうしておいて、食堂なり、電車賃を無理にも出させる算段をつけるので、そ知らぬ

顔をしてゐると、たうとう本格に、「ところ、五十錢寄附して下さい。歸りの車代なんぞ」とくる。

○：これを逃げると、さあ客席でその人の語つてゐる間中、騒ぐ、悪口をいふなど「いやがらせ」の戦法に出る。

○：だが、何故にこの神聖なる素義界を、かうした不徳漢の跳梁に任せなければならぬのか。これは、自分の道樂に對して眞の自覺を持たないといふ事である。何故に、さうしたものをびくつかなければならぬのか。

○：自宅訪問で主人公は不在でも、奥様への強要など全く例は山程あり、かうした手合の跳梁を許す時、近き將來に素義界はこれら害蟲の巢窟と化すであらう。

○：然らばこの驅除方法は如何と爲す。これは如何に本社が聲を大にして叫ばうと、各氏の自覺を促すの他はない。即ち、紳士の道樂として、素義の素義たる眞の本領を忘れず、斷乎として、斯る不徳漢の金錢強要を拒絶し、一日も早く、神聖義太夫道を明かに明るく樂しく、すべき事を、茲に再び聲を大にして叫ぶものである。

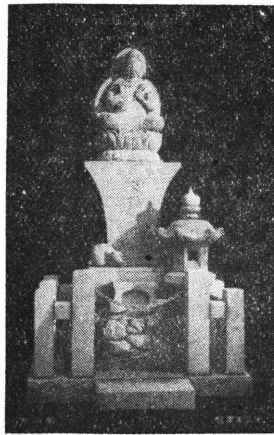
病弱の鶴澤豊助師

——奇蹟的に命拾ひ——

鶴澤豊助師は動脈陽腸で近所の萩原醫院に行つたが、此の腸腸は赤外線をかけて動脈から除けさへすれば手術をして全快するものであるが、腫物の位置を動すといふ事は到底困難で、十人が十人迄駄目だと言はれ「一層死ぬものならこんな身體では三途の川も劍の山も登れないから切つて下さい」と頼んだ處、それ程の覺悟なら一つやつて見よう」といふので、遺言までして、帝大の前川教授、昭和醫專の教授二氏の立ち合ひで赤外線をかけて手術をした處、腫物の位置が動脈から二分程除けたので奇蹟にも助かつたさうだ。何しろ去年は聖路加で腸を出して四時間に亘る大手術をして、まだ身體が元に復されぬといふのに又この手術に師匠の衰弱は一通りではない。師は「私が助かつたといふので、私のよるこんだより萩原さんのうれしさうであつた顔は眼に見える。手術料處でない、研究になつて難有かつたと手術料をさりました。實際私もよるこんでゐます。醫師は死といふ覺悟があつたからだと言はれますが、一つは日頃信仰の徳と御神佛の御加護の外はありません」と語つた。

犬猫供養塔の竣工

—盛大な供養式—



十二月十四日午前十時から東兩國回向院で、犬猫供養塔の入佛式が舉行された。これは日頃三味線に依る生活、即ち業ひを助くる物は犬猫といふわけで、これ等多くの犠牲犬猫諸眷族の供養を忘れては冥利が盡きると發心してこの供養塔の建立を思ひ立つたのが豊澤雷助、豊澤猿藏の兩師で、これに賛助員として豊澤松太郎、鶴澤勝鳳、豊澤猿之助、鶴澤司好、野澤語左工門の諸師に大日本義太夫因會が後後をして、事

務所を日本橋區蠣殼町猿藏師方に置き此の熱心な兩師の努力と斯界の人々より集つた奇特なる賛同のもとに盛大な供養式が擧げられたのである。

此日、十時の定刻前より霜を踏んで雲の如く集つた人々は、素義界の有志を始め實に東都男女の師匠連を網羅し

中、小法師、洋、自、換、板、ま、れ、以、上、の、三、味、線、一、用、い、ら、れ、一、大、猫、の、数、か、き、り、な、き、事、を、苦、提、の、た、め、十、二、一、基、竹、供、養、塔、建、て、音、也、報、恩、の、事、奉、と、い、ふ、行、を、檢、の、象、牙、も、取、付、水、牛、も、予、禱、け、懸、重、を、加、へ、内、外、一、秋、の、法、要、に、因、縁、の、淺、から、さ、も、人、は、こ、の、墓、前、に、一、片、の、田、向、あ、つ、む、り、を、
リ、々、法

て回向院の堂内を埋めた。
讀經終りて發企人豊澤雷助、豊澤猿藏の謝辭に次いで豊澤猿之助は賛助員を代表して「門弟の猿藏が云々！」と

謝辭を述べ、因會々長竹本津賀太夫の祝辭、院主の挨拶があつて柳原伯、片山鬼作（淨曲協會々長代理）中澤巴（兜會代表）寶藏寺天昇（大東京素義聯盟代表）中野吳羽（聲友會代表）玉井松樂（五聲會代表）豊竹嚴太夫（女研代表）梅本香伯（香伯會代表）猪谷銀水（帝都素義聯合會代表）の諸氏交々祝辭又は感想を述べ、それより開眼式に移り一同はをくつき供養塔に參詣をして、犬猫に供養をした喜びは人々の満面にあふれてゐる。

かくて三味觀世音とその名もゆかしく義太夫祖先の墓碑と並んで永しに香烟の立ちのぼることになつた。因に此の大偉業を全ふした豊澤雷助、豊澤猿藏兩師の美談も又永久に盡きぬものである。（寫眞は犬猫供養塔三味觀世音と村上浪六氏の碑文）

▽▽▽ 全國素義略傳 5 △△△ (イロハ順)

廣く日本全國といはず、遠く海外の素義名流略傳を掲載し、以てその藝歴その他を知り、後日のよき記念と致したく、本社は早くよりその編纂に着手致してをりましたが、多數の方々より非常な好評を博しました事に力を得て、逐次毎號掲載し、やがてはこの全國素義略傳を以て、全國素義大觀とならしめたく、何卒御免倒乍ら御投稿下さいませやう、御願ひ申上げます。尙氏名の上は併名にて、次の質問に御解答を得たわけでございます。

(一) 出生地 (二) 現住所 (三) 所屬又は會名 (四) 師匠名 (五) 始めた動機 (六) 修得年限 (七) 愛用する語物 (八) 餘技

一 朝 鈴木新兵衛 円六 岡崎 豊

(一) 東京市神田區旅籠町 (二) (一) 和歌山市 (二) 神田區神保町 (三) 竹韻會 (四) 竹本朝太 町 (三) 伊達子會 (四) 竹本伊達夫、豊澤松太郎、鶴澤司好 (五) 子 (五) 忙しき家業を始め、修養父が朝太夫最負より (六) 大正八の爲めにと思ひ (六) 五年 (七) 年頃より (七) 鮎屋、合邦 (八) 十種香、揚屋、壺坂、鳴門なし。

二 樂 清水 宏祐

(一) 岐阜縣 (二) 淺草區千束町 (三) 野澤頓平 (四) 廿二才より友人にすゝめられ (五) 二十六年 (六) 沼津。松王 (七) 商賣以外の手工

和 舟 小林 和助

(一) 東京市 (二) 淺草區役所通り (四) 豊澤團好、鶴澤絃平 (五) 最初は哥澤であつたが、師匠が遠くへ轉居したので、近間の團好に就て義太夫を始む (六) 七八年 (七) 赤垣、油屋、忠六、吃又、合邦 (八) 義太夫

花笑改メ 佳壽乃 藤村佳壽乃

(一) 岡山縣 (二) 板橋區練馬向山町 (四) 鶴澤新作、豊澤鶴助 (五) 岡山近郷全部語るといふ位淨瑠璃の盛んな處、身體の爲め始む。 (六) 十年 (七) 鳴門、酒屋、太

十 (八) 清元

有 曲 保坂 幸治

(一) 東京市 (二) 京橋區銀座 (三) 語樂會 (四) 野澤語左衛門 (五) 親代々音曲が好きより (六) 廿五年 (七) 岡崎、引窓、累 (八) スボーッ

華 笑 石川 頂二

(一) 神奈川縣 (二) 芝區芝公園 (三) 勝風會 (四) 鶴澤勝風、鶴澤勝八 (五) 健康法として友人にすゝめられ、聲を出して居れば身體の具合よし (六) 十年 (七) 喜内、陣屋、鮎屋、志度寺、寺子屋 (八) 趣味は義太夫

吳 羽 中野 義定

(一) 富山市 (二) 大森區久ヶ原町 (三) 聲友會 (四) 豊澤猿三郎 豊澤猿藏、豊澤猿之助、竹本清助 (五) 健康上及び國民性の研究 (六) 十三年 (七) 合邦、布四、

先代、又助(八) 書畫批評、盆栽

花王 高橋 熊次

(一) 大分縣 (二) 豊島區集鴨六
丁目(四) 豊澤鶴助(五) 子供の
時より好きであつたが稽古は四十
五才位より(六) 出たり引込んだ
り十五年位(七) 寺子屋、五斗、
三日太平記、又助、太十、勘作住
家、伊賀五(八) 義太夫の外なし

金鳳 金田權之助

(一) 廣島 (二) 淺草雷門(四)
野澤道之助(五) 胃病(六) 十二
三年(七) 阿漕、瀧、合邦、忠六
彌作、赤垣

錦松 錦學四郎

(一) 山梨縣 (二) 深川區清澄町
(三) 五十義會、杵三會(四) 豊
竹岡三(五) 大正十二年赤坂演伎
座にて大阪の鏡太夫の梅忠を聴い
てから始む(七) 梅忠、寺子屋、
太十(八) デパート見物

壽樂 平井金之助

(一) 東京 (二) 東京市品川區北
品川(三) 朝見會(四) 宮造師凡
一年半、金造師凡二年、猿之助師
約一年、殿母太夫師一年、朝見太
夫師一年半(五) 義太夫を始めたの
は大震災以前にて、大正九年頃野
澤金造師について約二年間、大正
十年後豊澤猿之助師が濱町住居時
代に約一年半、震災後は殿母太夫
師に三段稽古をし、十三四年間義
太夫を全く休み、昨年の夏より朝
見太夫師に就て今日に至る。(六)
凡七八年(七) 太十、沼津、其他
(八) 長唄、哥澤外諸藝

六 小松榮太郎

(一) 富山縣 (二) 葛飾區本田遊
江町(三) 五十義會(四) 竹本時
之助(五) 其の名の通り無病希望
下から讀むと六瓢「無病」(六) 七
年(七) 彦九、寺子屋、伊賀五、

太十、野崎、酒屋(八) 繪畫、彫
住吉區昭和町西一丁目三番地へ
轉居。

靜波 日野彌三郎
▼豊竹和歌吉 電話京橋八七七三
番開通。

(一) 淡路 (二) 大森區市野倉町
(三) 兜會(四) 竹本朝見太夫、
鶴澤勝八(五) 健康
▼竹本巴津昇 電話中野五七九三
番開通。
▼鶴澤燕作 日本橋吳服橋二丁目
三番地へ轉居(電話日本橋一四八
六番)

當座帖

▼宮島和紅氏 王子區下十條町五
一七番地へ轉居。
▼南方松若氏 同姫松氏は大阪市
京。

蒸風呂開業の挨拶

拜啓 向寒の候諸彦益々御清祥の段奉大賀候
緒て今般太棹誌上に廣告の通り蒸風呂療養を副業として
開設仕候元來小生の正業とは全然掛け離れたる仕事に候
へ共自身自身此療法を體驗致し其の効果の顯著に驚き且
つ信賴致し世の惱める人々の爲めにも心付き開業を思
ひ立ちし次第に御座候是非御試みに何卒御來所の榮を賜
り度願上候

俳名 都 福田清太郎

帝都護謨製造所の發展

所主は我が田口司重氏

この所大いに大舞臺で、本格的な演技を示されてゐる田口司重氏の經營にかゝる、帝都護謨製造所は、この程、雑司ヶ谷から今度巢鴨六丁目へ移轉された。

こゝは元資本二十五萬圓の共同護謨の工場であつたが、田口氏の手に入つてから、三ヶ月に亘つて大建築を行ひ、敷地七百四十坪、建坪五百五十坪といふ大工場が竣工されたのである。

原料はシンガーポールより直輸入で、一萬三千キロの動力電氣の外燃料は自然に竈に落ちるといふ、素晴

しき近代科學を利用してゐる。一分間に千廻するといふネリロール機を始め、ゴム引伸機、乾燥機等凡ゆる機

械が完備されて、精巧なる製品が、中央市場を目掛けて、毎日送り出される。

所主司重氏は、この實にいふべからざる大多忙の中に、晝休みを利用して、天神下の豊澤園吉師の許へ、お稽古の足を運んでをられるのである。

日新製作所の進展

電氣製作の湯原清司氏

湯原清司氏は昨年大井に轉居されると共に、住宅裏空地に工場を建築され、巻煙草ケースの電氣製作に没頭、細心なる研究と日夜の努力に依つて極めて精巧にして、最新のケースを世に

出す事に成功された。が、最近京橋の京二ビルに事務所を設置して、右ケースの他懐中鏡、コムバクト、菓子器等の製作事業を擴張して、三越、松屋、伊勢丹等の、各一流デパート

を始め、明治製菓全國販賣店の出荷にこれ亦大多忙を極め、ビル會社など、大會社より歳末年始の贈答用品としての註文殺到して繁忙の上に、繁忙を重ね、この所ゆつくりお稽古も出来ない始末だが、なんにしても商賣繁昌は結構な事である。

『人たる者上下の差別なく禮儀を正しうすべし、禮儀正しき人は其の人格を表示するものなり』と事務所の正面に貼り出されてゐる、以て氏の人格を覗うに足る。

先づはめでたしと來年の活躍を、一層期待する次第である。

× × ×

太棹社
彙報

▽通信又は番組御送付なきもの、本欄に掲載洩れは御用捨を願います。
 ▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。但し語り物又は出演者の變更された場合は重ねて掲載する事もあります。
 ▽太棹巡禮記に書きました際は本欄にその重複を避けます。

— 記者 —

見臺開き 竹本三福連

祖樂・三司・福代の三氏

竹本三福連であり日の出會々員であり、そして平常熱心に此の道の鍊磨に精進してゐる右三氏の見臺が、今度一度に出来てこの披露會が浮谷祖樂氏主催の下に十一月十九日並木俱樂部に華々しく開催された。當日の語り物は左記の通りであつたが、わけて浮谷氏の令孫ひろ子さん、福代氏

の愛娘かつ子さんの可愛らしい野崎村の道行は満場大喝采を博した。
 酒屋（喜代子、琴歌）朝顔（巴摩子、三福）十種香（琴歌、喜代子）壺坂（雪枝、三福）紙治（美鶴、鶴松）新口（三司、三福）太十（祖樂、三福）舞踊（野崎道行）お染（ひろ子）久松（かつ子）山

名屋（福代、三福）帶屋（阿清）坂ノ下（昇、三福）湊町松、琴歌）日蓮記（竹聲、猿（鶴松、琴歌）

藏田都鳥氏

入賞記念義太夫會

竹本都太夫連の新人藏田都鳥氏は今秋東都五十義會に於て一躍百廿七點を獲得して一等に入賞したので、その記念祝賀として十一月廿日常整俱樂部に於ける都太夫師納會の席上入賞の語り物「酒屋」を演じ「今頃は半七さん」を書

き込んで大澁の菓子折を記念として聴衆に配布するなど頗る盛會であつた。

□ 田庭
 冬ざるゝ窓の灯から
 漏るゝ三味

寶藏寺家

慰靈義太夫會

聽いてその名文名曲を嘆賞
語て極まりなき趣味を誤樂
に、天昇氏の御兩親の斯道を
愛好されたのは有名であつた
由である。氏は毎年三月廿九
日と十一月廿九日、自邸にて

義太夫會を催はして慕はしき
此二靈を慰むる事を例とされ
てゐるが、去月廿九日も正午
より高圓寺の本宅大廣間にて
開催された。

當日は武藤壽昇、倉田登喜
和氏を始め、竹本都太夫夫妻
鶴澤勝助夫妻など參會し、左
子)

近江清華氏

忘年義太夫會

平常は本所深川の席亭では
語られぬ近江清華氏の、此吉

例太夫會だけは盆と暮の年二
回本所深川に限られてゐるも
のである。此の催は盆の供養
暮れの供養といふ意味にて、
盆供養の際には吳服石礮其他
の景品を山と積み、一人も空
籤なしといふ供養振りであつ
たが、十二月十五日文化俱樂
部に暮れ供養の忘年義太夫會
が催され、今回は一等ネル一
反五十名、二等同半反貳百名
といふ素晴らしさに、此方面
の貧困者にはこよなき慰安と
なり、鶴首して開催日を待つ
たファンは午後二時頃より詰
め掛け五時には満員の盛況を
呈し、序席に清華、智恵子、
千賀子、榮子氏にて(絃寛三
郎)中將姫の掛合があつて、
次に近江氏令嬢君子さんのレ
コードに合せて童謡「まりと
殿様」「御所車」「やなぎの
雨」など頗る鮮やかな舞踊に
聽客は恍惚とし、次いで清華
氏は「寺子屋」をかゝる處か
ら泣笑を抜いて段切まで、智
恵子、千賀子、榮子さんなど
の七段目(折からより)「掛合」
に清華氏が九太夫をつきあつ
ていづれも大喝采にて八時半
終演、各々福引を抱いてほく
く散會した。

竹本團廣連忘年會

竹本團廣師は今春鶴見より
西巢鴨へ轉居して稽古場を開
いたが、十二月十五日山口氏
及び綾秀會の後援で日暮里金
松亭にて忘年義太夫會を催ほ
した。

酒屋(團廣) 毛谷村(治光) 長局(壽飄) 合邦(錦玉) 阿
十種香(綾登) 安達(壽光) 漕(里風) 絃(鶴澤燕三、竹
鳴門(廣司) 寺子屋(歸世花) 本綾秀、竹本團廣、秋枝長門)
鈴ヶ森(團政) 御殿(美靜)

野澤道之助連

忘年義太夫會

十二月十六日午後三時より
並木俱樂部にて開催、野澤道
之助プロダクション、大スタ
ー連總出演、オールトーカー
といふので、左記諸氏の大力
演で非常な盛況を極めたが、
大切の濱松家より勢揃ひは衣
装髪をつけての大景物に聴客
は抱腹絶倒拍手喝采であつた
太十(さつき) 寺子屋(語
好) 本下(有明) 儀作(つば
め) 壺坂(金彌) 太十(銀司)
忠四(筑波) 七段目(掛合)
由良之助(清) 重太郎(道之
た。

助) 彌五郎(つばめ) おかる
(操) 力彌(有明) 喜多八(五
口) 平右工門(金鳳) 濱松屋
|| 駄右衛門(清) 辨天(金鳳)
南郷(銀司) 番頭(道之助)
小僧(有明) 勢揃ひ || 駄右工
門(三幸) 辨天(金鳳) 忠信
(清) 赤星(五口) 力丸(つ
ばめ) なほ濱松屋の幕間に筑
波氏が長唄「楠公」を上演し
た。

なほ今回春和、旭兩氏不快
の爲欠演は惜しい事であつ
た。

巴津天會

忘年義太夫會

納會に立ちまはる事昨年の
卅六回より百餘回に一躍、本
年の納會期を頗る賑はせた天
昇氏は、巴津天會恒例の忘年
會を來る十二月廿五日正午か
ら常盤俱樂部に開催される。
何しろ人氣最高潮の氏の事と
て、語り手には素義有志を始
め、玄人の太夫三味線大多數
にて掛合數番、午後八時に終
らう。

演をして例に依つて客席を宴
會の席に慥へ大宴會に移るの
であるが、昨年は恰も文樂座
東上の際とて、吉田玉徳、玉
昇、文之助等も参加して床世
話連も加り、隠し藝珍藝續出
一時過ぎ迄ドンチャン騒ぎで
あつたが、今年はより以上の
豪華な盛會を極めることであ
らう。

豊澤良造連忘年會 宇知和會忘年會

記事間に合はず
残念ながら掲載
不能。

義太夫因會の總會

◆日本帝都義太夫因會と改稱◆

十二月十五日午後十時より茅場町宮松亭に開會、先づ會長竹本津賀太夫師は開會の辭を述べ、續いて顧問豊澤松太郎、會計豊澤雷助、委員鶴澤司好、竹本都太夫、豊澤猿藏、豊澤團吉、豊澤新次郎諸師に十年度の表彰狀を授與し、豊澤新次郎師は委員を代表して謝辭を述べた。然して會長を始め役員全部退役改選を行ふ事になつたが、議長に梅本香伯氏を推薦した處、同氏は『入會の承認はしてゐるが、まだ入會はしてゐないから迷惑だ』といふので前會長竹本津賀太夫師を議長に豊澤新次郎師が補佐として議事に入る。

四名、三味線より四名選出する件などの意見を述べ、豊澤團吉師は因會前途の向上に關して、竹本近衛太夫師は因會大會の責任切符に就て、竹本津賀太夫師は歌舞伎座に於ける素女會の盛況より説いて、男太夫も年一回位新橋演舞場又は明治座あたりで大會開演の希望、豊竹巖太夫師は淨曲協會が大會を開催する件に就て、各自その希望を披歴し、役員の改選に就き投票はむしろ弊があるとしてこれを指名的互選として會長は竹本津賀太夫師(留任)を推し、鶴澤司好師を副會長に、豊澤松太郎、鶴澤勝風兩師を名譽顧問に、豊澤猿之助並に新入會の梅本香伯兩師を顧問に、會計の二名は豊澤雷助、豊澤猿藏兩師に滿場一致、それより理事の

人選といふ事になつたが、投票と互選論と、暫時は甲論乙駁、結局、會長と顧問に一任する事になつて、三氏協議の結果、太夫側より竹本相模太夫、竹本東太夫、竹本浪花太夫、竹本近衛太夫、豊竹巖太夫、三味線側より鶴澤寛三郎、豊澤良造、野澤道之助、豊澤團八鶴澤紋左工門、理事長を巖太夫師に決定された。

因に同會は今回『日本帝都義太夫因會』と改稱する事になつた。
鶴澤燕作(辰六と改名)鶴澤玉勝、鶴澤延左工門、豊竹巖春太夫(新加入)豊澤宗之助(再加入)
附記 定刻より二時間半も開會が遅れたので、大分こぼしてゐた人があつたが、時間は嚴守されたいものである。

淺草音女會(第四十二回)

十一月廿日午後三時より公園俱樂部で開演、例に依て滿員の盛況を呈したが、同會は十二月より一、二と三ヶ月休演の上、三月廿日四十三回を賑々しく開催する事になつた。
當日の語り物は左の通り
日高川(喜代葉、富之助)

鈴ヶ森(小まち、富之助)山名屋(松次、かきつ)辨慶(富千代、富之助)鮎屋(メ春、志磨吉)草履打(八重吉、綾春)合邦(昇之助、志磨吉)河庄(仲勇、仲吉)逆櫓(綾春、かきつ)吉田屋(富之助、富千代)大切竹本津賀太夫作曲

討報

岡田翠雨氏

二三年前迄泉の如き其蘊著を本誌に發表されてゐた西宮の岡田翠雨氏は永々病氣靜養中の處、十一月廿日午後三時十分遂に逝去されたが、氏は多くの新聞雜誌にも關係あり、多年斯界の研究家として、その造詣は深かりし事とて、各方面から惜まれてゐる。享年七十二歳。

『前略……身體の方も十分に御座なく、岡田氏の事は是非お話も致し度存候へ共、今急に何を申上げるといふ事も出来ず、ゆる／＼お話を致し度存居り候、承り候へば大阪夕刊に福良竹亭氏が委しく執筆されをり候由に候も、それさへも未だ拜見致さず、折角の御言葉に反き残念に御座候……中略……いづれ拜肩萬々申述度、岡田氏の永眠は實に惜しき極みに候……竹本土佐太夫……』

右は本社が直ちに故人と別懇なりし竹本土

佐太夫氏に思ひ出話の寄稿を乞ふた處、病後未だ日淺き氏より左の通信に接したのであります。茲に謹んで哀悼の意を表します。

三宅正平氏

三宅孤軒氏の嚴父正平氏は三年前に發病、爾來神奈川の大船に轉地療養中であつたが、十二月八日午後三時五分遂に永眠された。享年七十三歳。逝去の報傳はるや、孤軒氏發行にかゝる全國同盟料理新聞、二葉、鮎、鱧の機關紙等の關係筋を始め、何しろ交際家の事とて、政界、文士、俳人、或は演藝界よりの弔問客で大混雜を極めたが、十二月十三日午後一時より本郷駒込の光源寺に於て告別式が行はれた。

豊澤仙十郎師息

豊澤仙十郎師長男正夫君は去月十八日勉強中突然急性腦膜炎にて死去。

君は商業學校に通學して秀才の批判高かりしも、一朝病寃の爲めに仆る、現誠は人界の常にて老幼天壽の別なしと雖も、此少年にし

て前途暗憐の内に瞑目する君の胸裡を考察して哀悼の念を禁じない。廿日告別式舉行堀内立法寺に葬る。

床世話大米事

宮坂熊太郎老

大米宮坂熊太郎老は三年前に發病し爾來自宅に靜養中の處、十二月十八日午前六時遂に黄泉の客となつた。

老は初め素義として斯の道に入り、其後太夫となつて豊竹勝太夫と名乗し事もあり。床世話に轉じて睡會を起し、會長として廿七八年の永き星霜を重ね、此間同會の爲め盡瘁せし其勞は一方ならず、一昨年四月並木俱樂部にて盛會なる隱退披露を催ほしたが、其後今日まで病中を推して會長に留任してゐたものである。享年七十三。

なほ發病したのは赤坂鈴木松齋氏邸であつた因縁から、醫師は松齋氏の懇切なる斡旋に依る由である。

江尻

栗田 金昇

▼故栗田生駒太夫追善會

今般生駒會主催にて當市には馴染深き竹澤龍造一座を聘し、十月廿、廿一の兩日榮壽座に於て故栗田生駒太夫追善義太夫會を開演致しました。東京よりは特別出演として都氏、濱松よりは美登勢氏の應援出演もあつて頗る盛會を極めました。

▼初日：又助（一房、愛吉） 太十（清響、文彌） 布四（聲保、てつ子） 八陣（港、文治） 沼津（安樂、てつ子） 先代（都、米壽）
▼二日目：日吉（生鶴、文彌） 朝顔（一句、文彌） 辨慶（糸千代、力助） 合邦（近松、力助） 太十（美登勢、寅男） 佐倉（榮惠、力助）

神奈川

魁家 廣丸

毎度難有御禮申上候陳者坂東勝治劇一行儀

十一月十六日より三日間神奈川縣長後町長後座にて開演致し出演御連中は越巴、奇聲、加保留、玉五、三味線は豊竹和歌吉、豊澤猿幸其他に有之次いで十九日より各寺院主催にて鎌倉劇場に於て日蓮劇を公演仕候

宇都宮

都 雀 會

▼第一回義太夫大渡ひ會

貴社益々御隆昌の段賀上候陳者當市義太夫界の發展は此頃素晴らしきものに有之時折例會を開催致しをり候都雀會は今回みやこ會と合同第一回義太夫大渡ひ大會を十一月廿三日の祭日曜の夕五時より池上町第一八百駒四階ホールにて催し候處非常な人氣にて開場早くより滿員の盛況を呈し申候左に番組を通信仕り候

▼初日：紙治（満里子、都雀） 酒屋（一丸、都雀） 寺子屋（大和、都雀） 日吉（竹松、ちよ） 十種香（一の、和子） 安達（清壽、都雀） 壺坂（巴、都雀） 先代（清子、竹松） 太十（貴昭、都雀） 玉三（光、都雀） 鳴門（磨澄、都雀） 野崎（掛合） お染（和子） 久作（かほる） およし、母（梅華） 久松（一平） お光（ちよ）

絃（都雀、ツレ、竹松、富春、六津多）

▼二日目：本下（清司、一平） 太十（語巧、都雀） 辨慶（論争、都雀） 揚屋（ちよ、和子） 柳（一平、都雀） 小磯（梅華、一丸、合邦） かほる、都雀） 酒屋（光風、都雀） 新口（富春、都雀） 堀川（一〇、都雀、ツレちよ） 寺子屋（掛合） 松王、小太郎（貴昭） 千代（巴） 百姓（大和） 玄蕃、菅秀才（清司） 御臺、戸浪（一〇） 源藏（清壽） 絃（都雀）

大阪

藤井 天海

▼義童勘太郎淨るり會

十一月十七日大阪市生玉寺町大寶會にて演奏、此大寶寺は近松門左衛門作お千代半兵衛宵庚申の文章中、生玉大寶寺の御説教とあるは同寺の事にて、尙去月發見されし繪本太閤記尼ヶ崎の段の作者近松やなぎの墓碑及義童勘太郎の記念碑等あり、十七日午後二時より同寺に於て法要を営み、後義童勘太郎の淨曲を拙翁作詞作曲引語りにて演奏、十九日は同町本誓寺にて廿四日同町隆壽寺にて演奏大盛會なりき。

福 島

鈴 木 錦 祥

▼若葉會秋季大會

貴社愈々御隆盛大慶至極に存じます。先日綿地武笠宏亮、高橋花王氏等の後援で鶴澤六太郎師の催しが小石川俱樂部で開催されましたので、私は當地六太郎連を代表して應援に上京、皆様の御上達振りには敬服致しましたが、當地も益々盛んに愛好者も増し猛練習を續けてゐますが、去る十一月廿五、廿六兩日午後五時より聚樂館に於て秋季競演會を開催致しました處二日間共満員の盛況を呈し、出演諸氏の大力演に頗る好評を博しました。

(初日) 梅由(喜奴子) 本下(才司) 安達(六甫) 太十(夏井) 沼津(吟昇) 野崎(瓢) 合邦(錦祥)

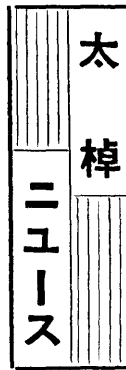
(二日目) 御殿(喜奴子) 紙治(夏井) 安達(才司) 太十(六甫) 寺子屋(吟昇) 新口(瓢) 玉三(錦祥)

大日本淨瑠璃界社

七週年記念大會

同業福岡の大日本淨瑠璃界社は創立七週年

記念として、十一月九日より十四日迄六日間縣公會堂に於て全國素義大會を開催、各會有志多數の後援の下に連日盛會を極めたが、出演者人氣投票は面白き試みとして頗る好評であつた。



◆野中一竹氏は十二月七日夜自宅で朝見會會友平井壽樂、白井井孝、松岡波朝氏の外に松岡茂里雄氏を招き忘年義太夫會を催はす。

◆福島縣平町鶴澤六太郎連の錦祥、瓢氏は十二月九日上京、菊川俱樂部にて當地の舊六太郎連と合同義太夫會を開催。

編輯後記

○昭年十年度最輯號の編輯を終りました。

○本年は東都五十義會、帝都素義聯合會の二大會を始め、第一に本社主催の東都素義名流大會が産聲を擧げ、次いで大東京素義聯盟審查會が生れ、國民新聞の大會、報知の東西合

同と連續的大會に加へ、本社毎月の吉例たる松屋ホールの東都義太夫會、白木屋ホールの淨曲振興會は益々好評裡に盛況を極め、友人側では因會の大會は勿論とし、素女會の大々的歌舞伎座進出、其他各種の大會が盛んに開催され、或は素義連名の深川成田不動尊の猷燈、犬猫供養塔の建立、等々、實に近年稀な多事の年で、我が義太夫界の隆盛招來の前兆とも見るべく、誠に祝福に堪えない次第であります。

○初學の方々は申すに及ばず各方面より好評を戴いて居ります『繪本太功記十段目』の解説は、執筆者病氣の爲め本號は遺憾乍ら休載致します。

○本誌後援名譽會員諸氏を初め、愛讀者誌友諸彦の御援助に依り本誌はこゝに又一つの歸ひを重めます事をよろこぶものであります。

○新年號の表紙は宮尾しげを氏の筆によつて目出度福祿神が畫かれ、齋藤孝三、小泉蛙鳴氏は研究物を執筆され益々その内容の充實に努力致しますれば、今後一層の御眷顧を賜らんことを切に御願ひ申上げます。

一 芳 河 士 一

後本誌
名譽
會員

(イロハ順)

吉安竹中平北和嘉松綿平吉岡廣鈴高須
 田藤内澤田島喜本貫野川崎瀬木島賀
 登くを 平北春巴春六ろ浪田ろ一一一
 盛ろる巴和斗和常子助昇補六は朝廣鳳
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

(東京之部)

田大松竹紺加飛大本小鈴木本神福保安堀藏
 口用尾内 藤 石和多林木木馬田々藤 田
 辰嘉武も我 藤 かな可和和 大里柳長都とさ都
 壽津市つ笑兜め笑笑舟樂熊芳蝶平昇わ鳥
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

水田是鈴加瀧國石本中高高乃矢萩宮片乃金井正
 戸中澤木藤脇井川城野野村富原本山村井上田
 部 廣悟兒福つま華冠吳 乃 っ武ば素辰 大
 壽笑園雀勝ばと笑之羽昇菊靱ほ藏め弘稻巽龍
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

川霜錦菊井金細間平木波寺大及松大鳥寶杉松原
 奈島地田田川宮井村多岡塚川本築田藏山岡田
 部 錦 錦 菊 金 川 さ 井 さ 野 三 三 三 朝 天 天 語 語 越
 銀 錦 錦 菊 金 川 さ 井 さ 野 三 三 三 朝 天 天 語 語 越
 司司松志泉鳳清ら榮え樂幸鳳旭章葵賞昇樂松巴
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

秋山ゆたか氏 岩田成氏 高瀬操氏 三ツ木美登利氏 吉田美地句氏 横井三由氏 鈴木寶氏 鈴井松樂氏 玉井松樂氏 菊地秋月氏 平井樂氏 山田瓢氏 秀藤峯氏 伊藤猿氏 田口重氏 武笠亮氏 高品重氏 佐野美氏 小黒玉氏 桑原美氏 松岡雄氏 白井清華氏 近江清華氏

湯原清司氏 日野靜波氏 (地方之部) 米國平野一昇氏 同武榮玉氏 同杉山陶岳氏 同武田德昇氏

同兼廣廣玉氏 同西本西紫氏 同檀太宮下杉鳳氏 大坂毛受輝頭氏 足利福田都氏 米國細田眞玉氏 静岡村岡壽樂氏

新名譽會員

田口重氏 綿貫六助氏 霜島錦司氏

右の諸氏今回本社後援名譽會員御快諾を賜り難有奉深謝候

太棹社

(行發回一月毎)

第七十一號

定	一部	金三十錢	郵税二錢
價	六月分	金一圓八十錢	郵税共
廣	一年分	金三圓	郵税共
告	特別	一頁	金貳拾圓
特	別	一頁	金參拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
 ▼誌代は總て前金御拂込の事
 ▼なぞ可く振替に御送金の事
 ▼郵券代用は一割増但二錢切手の事

昭和十年十二月廿三日印刷納本
 昭和十年十二月廿五日發行

東京市小石川區音羽二丁目四
 編輯兼 發行人 富取 壽鹿
 東京市牛込區早稻田町五八
 印刷人 栗原 榮松
 東京市牛込區早稻田町五八
 印刷所 栗原印刷所
 東京市小石川區音羽二丁目四

行所 太棹社
 振替東京三一七八五番

新時代の

要求の

使用簡便な

豫防薬

ゴム製品、薬剤等の缺點を除いた無脂肪明麗性の錠剤で挿入直に溶解し完全な凝固と殺菌の重復作用を起しよく花柳病豫防の目的を果します。感覚自然的でありますからゴム製品の比ではありませぬ。精着なく使用後爽快の理想的豫防薬であります。本剤の使用によつて洗滌の必要なく毒物性の危険薬臭等なく連續御使用するも副作用弊害更にありませぬ。

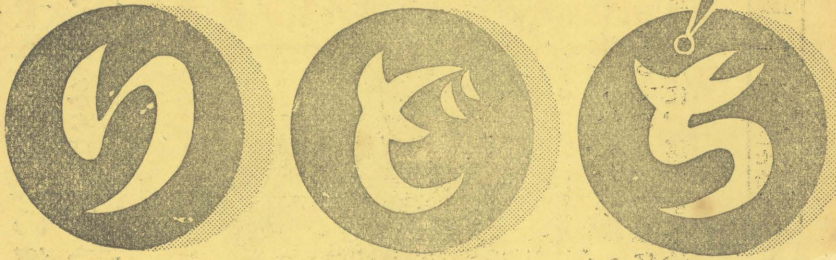
沸騰性錠剤

薬 二十錠入 壹円
 五十錠入 貳円
 一百五十錠入 拾円
 前金御注文送料本社負擔

東京市京橋區銀座二ノ三

新潮製薬株式会社

電話京橋二六四五番
 振替東京七〇一〇八番



關西料理

すつぽん焼

御前蒲焼なま

御宴會は、勉 べて安値に

円

六

九段下の名物
 電話九段三〇五一番

女中は皆藝人揃ひ・太棹の弾き手も揃へて皆様をお待ち致して居ります。

円六獨特のサービス

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

去月屋

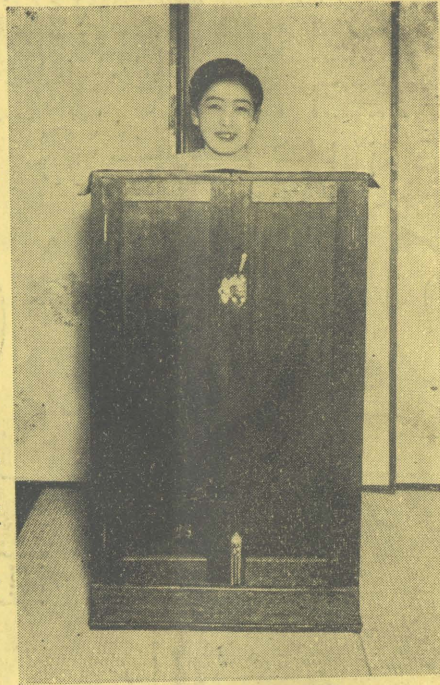
新橋二ノ八
 電銀二〇八

土井醫學博士外諸大家の絶讃を博したる

世界的發明と言はれる「蒸し風呂」

特

許



御氣分のすぐれぬ方は是非お試しあれ

適	神	痛	尿	道	炎
應	一般	婦人	病	喘	息
症	胃	腸	病	神	經
	痔	疾	不	眠	症
	淋	病	リ	ウ	マ
			チ	ス	

血行不順より来る肩のこり冷込み等には特効あり

◇時代が生んだ最新療法!!

痛い手術、注射するでなく、呑みにくい服薬することなく療養時間僅か二十分、しかもぼか〜と、暖い春心地の内に、諸症を全治にみちびく、全く理想的療法であります

日本橋區蠣殻町四丁目二番地

料金

一回 金七拾錢
十回券 金六圓

日本橋療養所

道順 (市電水天宮下車、新大橋へ向テ左側三ツ目横丁)